

ナドミド
ジャンチブドルジ
ラグチャー

モンゴル語の 音声と正書法

栗林均 訳



1983

ナドミド
ジャンチブドルジ
ラグチャー

モンゴル語の 音声と正書法

栗林均 訳



1983

Ж. НАДМИД
Ц. ЖАНЧИВДОРЖ
Б. РАГЧАА

МОНГОЛ ХЭЛНИЙ ЗҮЙ

АВИА ЗҮЙ, ЗӨВ БИЧИХ ДҮРЭМ

V АНГИ

БНМАУ

Ардын Боловсролын

Яамны хэвлэл

1971

目 次

音 声 学

- § 1. コトバの音声…………… 1
 § 2. 発音器官…………… 1
 § 3. 声と噪音…………… 2
 § 4. 音声と文字…………… 2

アルファベット

- § 5. アルファベット…………… 3
 § 6. どこに大文字を書くか?…………… 3

母 音

- § 7. 母音に関する理解…………… 5
 § 8. 母音の分類…………… 5
 § 9. 母音の表記…………… 6
 § 10. 補助母音…………… 6

普通母音と弱化母音

- § 11. 普通母音と弱化母音に関する理解…………… 7
 § 12. 弱化母音の表記…………… 7

長 母 音

- § 13. 長母音に関する理解…………… 7
 § 14. 長母音の表記…………… 8

二重母音

- § 15. 二重母音に関する理解…………… 9
 § 16. 二重母音の表記…………… 9

母音調和の法則

- § 17. 母音調和の法則に関する理解…………… 9
 § 18. 舌における母音調和…………… 10

§ 19. 唇における母音調和	11
消去される母音と接合母音	
§ 20. 消去される母音の規則	12
§ 21. 母音が消去されない理由	13
§ 22. 接合母音	14
母音に関するその他の注意	
§ 23. 識別母音	15
§ 24. 語末の弱化母音の規則	15
子 音	
§ 25. 子音に関する理解	16
子音の分類	
§ 26. 調音様式による子音の分類	16
§ 27. 発音器官の関与による子音の分類	17
§ 28. 声の有無による子音の分類	17
音節について	
§ 29. 音節に関する理解	18
§ 30. 音節分けについて	18
アクセント	
§ 31. アクセントについて	19
§ 32. 外来語のアクセント	20
若干の子音の説明と正書法規則	
§ 33. 子音 H の正書法	20
§ 34. 子音 Г について	21
§ 35. Б と В の正書法	21
§ 36. 子音 П , К , Ф , Ц について	22
§ 37. 語頭の X と Г を書き分ける規則	22
§ 38. 語頭の Д と Т を書き分ける規則	23

§ 39. 七子音の規則	23
§ 40. 九子音の規則	24
§ 41. 連続する二子音と三子音の規則	24
§ 42. Ж, Ч, Шの後に書く短母音の規則	25
§ 43. 軟子音と硬子音	26
§ 44. 男性語の軟音化子音の識別規則	26
§ 45. 硬音符と軟音符の規則	26
§ 46. 軟音符とИの交替規則	27
§ 47. 軟音符がИにならない場合	28
§ 48. -ЫНと-ИЙНの正書法	28
§ 49. 動詞派生接尾辞-Лの正書法	28
§ 50. 単語の分綴規則	29
§ 51. 略語について	30
§ 52. 外来語の正書法	30
§ 53. 音声変化	31

音声学 АВИА ЗҮЙ (ФОНЕТИК)

§ 1. コトバの音声

人間のコトバは単語から成り立っている。単語にはすべて意味と音声の両面がある。たとえば、**би ном уншив** (私は本を読んだ) という文は三つの単語から成っている。この三つの単語にはそれぞれ異った意味がある。

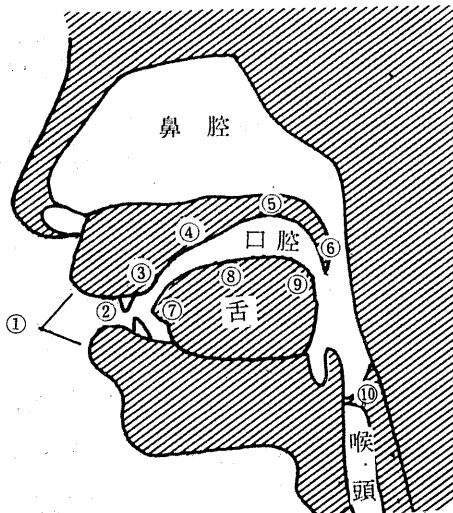
音声の面を見ると、それぞれの単語はいくつかの音から成り立っている。上の文の単語も個々の音に分けることができる。そうすると **би** という単語は **б, и** の二つの音から、**ном** は **н, о, м** という三つの音から、また **уншив** は **у, н, ш, и, в** という五つの音から成り立っている。単語を構成している音声を研究する学問を音声学 (**авиа зүй**) と呼んでいる。

§ 2. 発音器官

コトバのどんな音声にしても必ず発音器官が関係してつくられる。人間の肺、気管、喉頭、声帯、舌、口腔、鼻腔、口蓋帆、軟口蓋、硬口蓋、歯茎、唇などを発音器官という(図を参照)。

私たちは話すとき肺から空気を出す。その空気は、気管を通して喉頭に入る。喉頭の左右両壁には伸び縮みする二枚の筋がある。この筋を声帯 (**дууны хөвч**) という。二枚の声帯のあいだにある隙間を声門 (**дууны сүв**) という。喉頭は楽器のように精密なつくりをしている。

発音器官



- ① 上唇・下唇
- ② 上歯・下歯
- ③ 歯 茎
- ④ 硬口蓋
- ⑤ 軟口蓋
- ⑥ 口蓋垂 (のどひこ)
- ⑦ 前 舌
- ⑧ 中 舌
- ⑨ 後 舌
- ⑩ 声 帯

§ 3. 声と噪音

若干の音を発音するとき声帯が緊張し声門がせまくなる。このとき、肺から出た空気の流れが、その収縮・緊張した二枚の声帯を強くふるわせることにより声が出る。このように声帯を振動させて出た音を声 (дуу) と呼んでいる。たとえば а, в, и, о, у, ө, ү, л, мなど。

またある音を発音する時は声帯がゆるみ、声門が広がる。このとき、空気の流れは声帯をふるわせずに出てくる。こうして出た音を噪音 (анир) と呼ぶ。たとえば с, ш, х など。

いくつかの音を発音するとき、空気は口腔でなんの妨げもなくとどこおりなく外へ出る。たとえば а, о, у, а, и, ө。このように、とどこおりなく出る音は噪音を含まず声だけから成っている。

また若干の音を発音するとき、空気はとどこおりなく流れ出ず、舌や唇などなんらかの発音器官にさえぎられたり妨害されたりして外へ出る。こうした妨害にあつて噪音が生じる。声をまったく含まず、噪音だけからなる音もある。たとえば с, ш, т, ч, ц, п など。

いくつかの音は、声と噪音の両方からなっている。たとえば б, г, д, ж, л, м など。

ある音が、声を含んだ音かどうかを知るためには、両方の耳を手でふさぎ、その音を強く発音してみる。このとき耳の中に響きが聞こえれば声を含んだ音 (有声音) である。

これは声帯の振動がそのように聞こえるためである。

一方、声を含まない音 (無声音) を発音した場合、声帯がふるえないので耳の中にそうした響きは生じない。

§ 4. 音声と文字

コトバの音声は、記録や印刷にさいして特殊な記号であらわす。これを私たちは文字 (үсэг) と呼んでいる。文字と音声は、区別されるべき二つの異ったものである。文字は見たり書いたりできる。一方、音声は見たり書いたりできないが話したり聞いたりすることができる。たとえば, а, б と書けば文字であり, а, б と発音すれば音声である。

私たちは、おもに自分たちが話したとおりに書いている。しかし時には、正確に話したとおりに書かないこともある。たとえば, авч (取り, 取つて) と хавар (春) という語は、どちらにも同じ в という文字を書いている。しかし авч という語の в は両唇をあわせて、ほとんど п という音のように強く発音され, хавар という語の в は両唇をあわせず、少しすきをあけて弱く発音される。言語音のこうした細かい区別を表記にあらわすとしたら、あまりにも多くの文字をつくることになってしまうので、一つ一つの音声を文字であらわす必要はない。また二つの文字で一つの音をあらわすこともある。たとえば, わが国の新しい表記法では ы と ий の二種類の文字で長い и のみをあらわし, л と ъ の二文字で軟音化した л のみをあらわしている。

また, まったく音をあらわさない文字 (ь, ъ) もありうる。

アルファベット

§ 5. アルファベット

モンゴルの新しい表記法では35の文字がある。これらの文字の順序はきちんと決められている。このように一定の順序に配列された全文字をアルファベット (цагаан толгой) という。辞書の単語, 人名, 図書目録などはアルファベット順に並べられる。したがってアルファベットの全部の文字を順序に従って暗記しておかなければならない。

アルファベットと文字の呼び名

Аа	Бб	Вв	Гг	Дд	Ее	Ёё	Жж	Зз	Ии	Йй	Кк	Лл
ア	ベ	ウ	ゲ	デ	イエ	ヨー	ジェ	ゼ	イ	ハガス	カー	エル
Мм	Нн	Оо	Өө	Пп	Рр	Сс	Тт	Уу	Үү	Фф	Хх	Цц
エム	エヌ	オー	ウー	ペ	エル	エス	テー	オー	ウー	エフ	ハー	ツェー
Чч	Шш	Щщ	Ъ	Ы	Ь	Ээ	Юю	Яя				
チェー	イシ	イシチェー	硬音符	イー	軟音符	エー	ヨー	ヤー				

モンゴルの新文字規則では: а, о, у, э, ө, ү, и, й, ы, я, е, ё, ю の13文字を母音文字という。

б, в, г, д, ж, з, к, л, м, н, п, р, с, т, ф, х, ц, ч, ш, щ の20文字を子音文字という。

ъ と ь は, どんな発音をもあらわさないの, 母音でも子音でもない記号文字である。

解 説

- (1) к, ф, щ の文字は外来語にのみ書き, 本来のモンゴル語には用いない。例: **касс** (現金受払口), **кино** (映画), **фабрик** (工場), **Щорс** (人名) など。
- (2) Е の文字は **je** と **je** の二とおりの発音をあらわす。例: **ep** (**jeep** 九十), **embyy** (**jembyy** 銀塊), **ep** (**jeep** 普通一般), **epoeltai** (**jepeeltai** 祝福をもった) など。
- (3) Ю の文字は **ju** と **ju** という二つの異った発音をあらわす。例: **юм** (**jum** 物), **аюул** (**ajuul** 危険), **юдэн** (**juden** 防水帽), **юлхгэр** (**julxger** 腹などでつぶりした) など。

Е と Ю の文字については § 10 を参照。

§ 6. どこに大文字を書くか?

- (1) 文頭の文字は大文字で書く。

例: **Та номоо уншиж дууссан уу?** (あなたは自分の本を読み終えましたか)

Маргааш кино үзье. (明日映画をみよう)

Дэвтрээ гамтай эдэл. (自分のノートを大切に使いなさい)

- (2) 人の姓や名前は大文字で書きだす。

例：Доржийн Гомбо, Батын Гэрэл, Александр Сергеевич Пушкин.

また二語から成る名前に分けて書く必要があるときは、それらの間にハイフンを引き、両方とも大文字で書く。

例：Насан-Очир, Алтан-Алим

- (3) 町名、村名、アイマク名、ソム名、協同組合名、地名、河川・水域の固有名詞、ある動物につけた名前は大文字で書きはじめる。

例：Богд уулын ард Туул голын хөвөөнд Улаанбаатар хот оршино. (ボグド山の北、トーラ河の岸にウランバートル市がある)

Төв аймгийн Баянжаргалан сум.

Манай Хойлог (犬の名) өнөөдөр алга. (うちのホイログは今日姿が見えない)

- (4) 国名や、省など中央官庁の名称を略さずに書くとき、数語から成っていてもすべて大文字で書き始める。

例：Монгол Ардын Хувьсгалт Намын Төв Хороо (モンゴル人民革命党中央委員会)
Монголын Үйлдвэрчний Эвлэлүүдийн Төв Зөвлөл (モンゴル労働組合中央評議会)
Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улсын Ардын Боловсролын Яам (モンゴル人民共和国国民教育省)。

しかし、モンゴル (モンゴル)、Орос (ロシア)、Герман (ドイツ) などの国名を、人をあらわす普通名詞として用いたり、事物など普通名詞の前に定語として用いるときは小文字で書く。

例：Миний аав монгол гутал эмсдэг. (私のおとうさんはモンゴル靴をはく)

Бид орос хэл сурч байна. (私たちはロシア語を習っている)

Би герман х нтэй ярилцав. (私はドイツ人と話しをした) など。

国名の意味でこれらの名詞を用いる場合は大文字で書く。

例：Монго-Зөвлөлтийн ард түмний найрамдал бэхжэтүгэй. (モンゴル・ソビエト人民の友好が強化されんことを！)

- (5) 中央国家机关に所属する官庁名は、数語から成っていても最初の語の頭文字だけを大文字で書き、それ以外は小文字で書く。

例：Улсын багшийн дээд сургууль. (国立師範大学)

Аж үйлдвэрийн комбинат (工業コンビナート)

Дорноговь аймгийн Эрдэнэ сумын ардын депутатын хурлын гүйцэтгэх захиргаа.

(ドルノゴビ・アイマク, エルデネ・ソム人民代議員会議執行委員会)

- (6) 図書、著作、新聞・雑誌名は引用符に入れて最初の文字を大文字で書く。

例：Лениний “Юу хийх вэ?” гэдэг зохиол (レーニンの「何をなすべきか」という著作),
“Ү нэн” сонин (「ウネン」紙),
“Сурган хүмүүжүүлэгч” сэтгүүл (「教育者」誌)。

(7) 詩の各行の最初の文字は、意味が完結しているか否かにかかわらず大文字で書く。

このほか略語は大文字で書く。

例：Алтан нарны тусгалтай Амт төгөлдөр бэлчээртэй Агуу дэлгэр говь минь

(こがね色の陽光を浴び 滋味豊かな牧地におおわれた 広闊なわがゴビよ)

БНМАУ (モンゴル人民共和国)

НҮБ (国際連合=Нэгдсэн Үндэстний Байгууллага)

母 音 (ЭГШИГ АВИА)

§ 7. 母音に関する理解

言語音は、母音と子音の二つに分けられる。

肺から出た空気が声帯を振動させるだけで、口腔でどんな妨害もうけず、とどこおりなく外へ出る音を母音 (эгшиг авиа) という。

母音は声だけから成る。それらを発音するとき噪音は含まれない。モンゴルの文章語には、“а, о, у, э, ө, ү, и” という七つの基本的な母音がある。

§ 8. 母音の分類

母音は、第1に舌のどこで発音されているかの位置により、第2に発音にさいしてどんな発音器官が関係しているかにより、第3に発音にさいして口腔の大きさの状態により分類される。

1. 母音は、舌のどこで発音されるかにより三つに分けられる。

a) А, О, Уの母音は、後舌面で発音されるので、この三母音を後舌母音 (хэлний хойгуурх эгшиг) という。

b) Э, Ө, Үの母音は、中舌面で発音されるので、この三母音を中舌母音 (хэлний дундуурх эгшиг) という。

c) Иの音は、前舌面で発音されるので、これを前舌母音 (хэлний урдуурх эгшиг) という。

2. 基本七母音は、発音にさいして唇が関与しているか否かにより、円唇と非円唇の二つに分けられる。

a) О, У, Ө, Үの四母音は、両唇を丸くすぼめて発音するので円唇母音 (уруулын эгшиг) という。

b) Э, А, Иの三母音は、発音にさいして上のように唇が関係しないので非円唇母音 (уруулын биш эгшиг) という。

3. 母音は、発音にさいして口腔の大きさの程度により、狭, 中, 広の三つに分けられる。

- a) А は、発音のさいに口腔のすきまが大きいので広母音 (уужим эгшиг) という。
 b) О, Ө, Ө は、発音のさいに口腔のすきまが中くらいなので中母音 (дунд эгшиг) という。
 c) У, И, Y は、発音のさいに口腔のすきまが小さいので狭母音 (уйтан эгшиг) という。

このように母音が成り立つ状態は、下の表で見ることができる。

モンゴル語の母音表

	前 舌		中 舌		後 舌	
	円 唇	非円唇	円 唇	非円唇	円 唇	非円唇
狭		И	Y		У	
中			Ө	Ө	О	
広						А

§ 9. 母音の表記

モンゴル語には七つの母音があるが、わが国の書記法ではそれらを13の文字であらわしている。

モンゴル語の基本的な七母音を表記した а, и, о, у, ө, y, э を基本母音 (үндсэн эгшиг) という。я, ё, ю, ы, е, й の六つを補助母音 (туслах эгшиг) という。

§ 10. 補助母音

1. я, ю, ё, е の文字は、硬音符・軟音符・母音文字のあとや語頭にあらわれた場合 ja, ju, jo, je, jy, je のように、中舌子音 j と母音を合わせた一つの完全な音節をあらわす。

例： олъё (олъjo 手に入れよう), гаръя (гаръя 出よう)
 өгъё (өгъje あげよう), харъя (харъя 帰ろう)
 соёо (соjoо 牙), соёл (соjoл 文化)
 аян (аjan 旅), аюул (ajuул 危険)
 хүргэе (хүргэje 届けよう), яруу (jarуу 優美な)
 ёроол (jороол 底), юүлөх (jүүлөх 注ぎ移す)
 ертөнц (jөртөнц 世界), ээвэн (jээвэн せんべい) など。

しかし、я の文字は軟音化した子音の直後にあらわれた場合、上のような二つの音をあらわさず、а という一つの音をあらわす。

例： хяргах (хьяргах 毛を刈る), нягт (ньягт 緊密な), мянга (мянга 千) など。

2. и (ハガス・イ) は、母音に伴わずに単独で用いられることはなく、下降二重母音と長い и をあらわすときにのみ用いられる。従って и を補助母音に含めたわけである。

例：аймаг (アイマク), уйтгар (憂うつ), хүчтэй (力強い),
аймгийн (アイマクの), эхийн (母の) など。

3. ыは中舌面で発音される長い иをあらわした文字であり、常に男性語に書かれるよう規則に決められている。

例：ахын (兄の), нумыг (弓を), ногтыг (端綱を) など。

普通母音と弱化母音

§ 11. 普通母音と弱化母音に関する理解

モンゴル語の単語の第1音節の母音と、第2音節以降にあらわれた母音は、互いに違ったふうに発音されているように聞こえる。単語の第1音節にあらわれた短母音は常に明瞭にはっきりと聞こえる。このように、単語の第1音節にあらわれた短母音を普通母音 (ерийн эгшиг) と呼ぶ。一方、単語の第2音節以降にあらわれた短母音は、常に不明瞭に聞こえる。このように不明瞭に聞こえる母音を弱化母音 (または、あいまい母音 балархай эгшиг) と呼ぶ。

たとえば, хөдөлмөрлөх (勤労する), адаг (終り), хэвлэ (印刷する一語幹), ховор (まれな) などの単語の第1音節にあらわれた о, а, э, о の母音は、はっきりと聞きとれるので普通母音である。しかし第2音節以降にあらわれた母音は不明瞭に聞こえ、いったいどんな母音なのかほとんど聞きとれないので弱化母音である。

§ 12. 弱化母音の表記

モンゴルの新しい表記法では、単語の第2音節以降にあらわれた弱化母音を а, о, и, е, ө の五文字のどれかであらわしている。уやүの文字で弱化母音をあらわすことはない。

例：аравхан (十ばかり), оролцох (参加する), харих (帰る), хөшиг (幕),
өндөр (高い), өгүүлэх (述べる), ургац (収穫), үнэр (匂い),
утас (糸) など。

モンゴル語の単語の第2音節以降の弱化母音は不明瞭に聞こえるので、こうした弱化母音をどこに書くか、どこに書かないかに関して特別な規則がある。

長母音 (УРТ ЭГШИГ)

§ 13. 長母音に関する理解

モンゴル語の母音は、長くのばして発音することができる。たとえば, агаар (空気) と

いう単語の第2音節の **a** は、第1音節の **a** より長く発音されている。これにもとづき、すべての母音は長母音と短母音の2つを区別する。

普通の短母音より長く続けて発音される母音を長母音 (**урт эгшиг**) という。

モンゴル語は長母音と短母音で、単語の意味が区別される。長母音と短母音を取り違えて話したり書いたりすると単語の意味が違ってしまう。

例: нохой (犬)	_____	ноохой (鼠, リスなどの巢)
удам (遺伝)	_____	уудам (広い)
тос (油)	_____	тоос (ほこり)
нүх (穴)	_____	нүүх (包を移す)
цөрөм (山羊, 羊の乳を発酵させたもの)	—	цөөрөм (池)
төрөх (生まれる)	_____	төөрөх (さまよう)
ав (取る一語幹)	_____	аав (おとうさん)
арц (シベリア杜松)	_____	аарц (発酵させた凝乳の一種)
асагч (火, 光がつく物)	_____	асаагч (火, 光をつけるモノ)
үнэ (値段)	_____	үнээ (牝牛)
дэл (たてがみ)	_____	дээл (デール) など。

§ 14. 長母音の表記

モンゴル語の基本七母音はすべて長く発音されることができるので、基本的には長母音も七つある。しかしこれを表記にあらわすときには、様々に書き表わしている。つまり、

a) 基本母音の **a, o, y, e, y, a** が長く発音される場合は、同じ母音字をかさねて **aa, oo, uu, ee, yy, aa** とあらわす。

例: аав (おとうさん), саваа (打つ棒), оосор (紐), тоос (ほこり),
халуун (熱い, 暑い), өөх (脂肪), үүл (雲), ээрүүл (紡錘)
ээж (おかあさん) など。

b) 補助母音 **я, ё, е, ю** が長く発音される場合は、それらの文字のあとに適当な基本母音をかさねて **яа, яу, ёо, ёу, еу, еэ, юу, юу** などと書く。

例: туяа (光線), наяул (八十人して), оёос (縫い目), оёулах (縫わせる),
еэвэн (せんべい), аюул (危険), гиюүрэх (気が沈む) など。

c) 軟音化した子音のあとにある長い **aa, oo, uu** をあらわすときは、軟音符を **и** にしてその長母音の一つを省いて書く。

例: харь + уу — хариу (返答), тавь + аад — тавиад (五十くらい)
хорь + оотой — хориотой (禁止された) など。

d) 長い **и** をあらわすときは、**и** のあとに **и** (ハガス・イ) をつけるか **ы** という特殊な文字一字を書く。

例：багшийн (先生の), эхний (最初の), багийн (バク-行政単位一の),
модыг (木を), орны (国の), ахыг (兄を) など。

二重母音 (ХОС ЭГШИГ)

§ 15. 二重母音に関する理解

一つの母音は長く、あるいは短かく様々に発音することができる。こうしたとき、発音器官の配置は一定のままである。たとえば、а, аа, о, ооなど。

一方、二つの異った母音をいっしょに一息に発音するとき、発音器官の配置は一つの形から他の形に移る。

このように合わせて発音することを二重母音 (хос эгшиг) という。例：ай, ой, уй など。
二重母音は、二つの異なる母音から成っているが、その二つの母音がそれぞれ音節をつくることはなく、合わさって一つの音節をつくる。

例：аймаг (アイマク) ————— ай-маг
гахай (猪, 豚) ————— га-хай
нохой (犬) ————— но-хой
түймэр (火事) ————— түй-мэр など。

§ 16. 二重母音の表記

1. а, о, у, ү, э, я, ё の母音のあとに、音節をつくらない й をつけて、ай, ой, уй, үй, эй, яй として二重母音をあらわす。

例：айл (一家族の包), ойр (近い), агуй (岩窟), үйлдвэр (工場),
эвтэй (調和のとれた), яйжгар (ゆがんだ) など。

補足. モンゴル語に өй という二重母音はない。

2. 時には、母音 а の前に、音節をつくらない у をつけて уа という二重母音をつくることもできる。例：гуа (瓜), хуар (花模様) など。

この二重母音は本来のモンゴル語の単語にはきわめて稀で、外国から入ってきた少数の単語にあらわれる。

母音調和の法則 (ЭГШИГ ЗОХИЦОХ ЁС)

§ 17. 母音調和の法則に関する理解

モンゴル語では一つの単語に種々の母音が無関係に入りまじることがなく、一定の秩序

がある。単語の第1音節に **a, o, y** の母音のいずれかがあれば、後に続く音節に **ə, ɐ, ʏ** の母音はあられず、また第1音節に **o** があれば、後に続く音節に **a** があられることがないといったぐあいである。

また現代のモンゴル語では、第2音節以降の短母音はきわめてあいまいに聞こえるようになったので、それがどんな母音であるかは第1音節にどんな母音があられているかによって決められる。

このように、単語の第1音節の母音がその単語の後の音節の母音を決定するきまりを母音調和の法則 (**эгшиг зохицох ёс**) という。

母音調和の法則は、舌における母音調和と唇における母音調和の二つに分けることができる。

§ 18. 舌における母音調和

モンゴル語では、後舌面で発音される母音と中舌面で発音される母音が一つの単語にいつしよにあられることがない。

単語の第1音節に後舌面で発音される母音があれば、あとの音節にも同様に後舌面で発音される母音があられる。第1音節に中舌面や前舌面で発音される母音があられれば、あとの音節にも同様な母音があられる。これを舌における母音調和の法則 (**эгшиг хэлний талаар зохицох ёс**) と呼ぶ。

例：оюутан (学生), аргамж (革紐), уламжлах (継承する), идэр (若い), ёслох (あいさつする), юугаар (何で), эрдэмтнүүд (学者たち), өндөр өг (高所), үзэгдэх (見える), юүлэх (注ぎ移す) など。

後舌面で発音される **a, o, u, ы, я, ю** の母音を男性母音 (**эр эгшиг** または **чанга эгшиг**) という。これらの母音から成っている単語を男性語 (**эр үг** または **чанга үг**) とよぶ。

中舌面で発音される **ə, o, y, e, ю** の母音を女性母音 (**эм эгшиг** または **хөндий эгшиг**) といい、これらの母音から成っている単語を女性語 (**эм үг** または **хөндий үг**) とよぶ。

中舌面で発音される **и** を中性母音 (**саармаг эгшиг**) という。第1音節に中性母音をもつ単語は女性語に入れる。そういう単語には女性母音をもった接尾辞がつけられるからである。例：жймстэй (жимс 果実 — тэй ~をもった)

жилээр (жил 年 — ээр 造格接尾辞)

шилүүд (шил 峰 — үүд 複数接尾辞)

一つの単語に男性母音と女性母音がまざってあられることはない。しかし中性母音は男性語と女性語のどちらにもあられることができる。

例：ажиллах (仕事をする), харин (しかし、一方)
хөшиг (幕), элбэгжих (豊富になる)
など。

解説：

1. 二つの単語からなる語には男性母音と女性母音がまざってあらわれうる。

例：Өмнөговь (アイマク名：өмнө 南の говь ゴビ)
Арвайхээр (土地名：арвай 大麦 хээр 平野)
Батмөнх (人名：бат 固い мөнх 永遠の)
аргагүй (仕方がない：арга 方法 -гүй ~がない)

2. 男性語と女性語から成る単語に接尾辞をつけて変化させるときは、あとの単語の母音に従う。

例：Өвөрхангайгаар (ウブルハンガイを通して)
тусбүрээс (それぞれから) など。

3. 動詞の接尾辞-жээ, -чээ は男性語、女性語どちらにもあらわれる。

例：гарчээ (出ていた), байжээ (あった, いた), явжээ (出かけていた),
иржээ (来ていた) など。

4. 外国から借用して習慣化していない単語はこうした母音調和の法則に支配されない。

例：аптек (薬局), артель (同業組合), большевик (ポリシェビキ)
механик (機械技師) など。

§ 19. 唇における母音調和

モンゴル語では、一つの単語にあらわれる母音が舌において調和するだけでなく、また唇が関係する状態においても調和するというきまりがある。つまり：

- a) 単語の第1音節に **а** または **у** があれば、あとにあらわれる短母音は **а** である。

例：авдар (大箱), даалгавар (任務), хяргамал (刈り込んだ)
сайхан (美しい), удам (遺伝), суйлах (突込む) など。

- b) 単語の第1音節に母音 **ө** があれば、あとにあらわれる母音は常に **ө** である。

例：сөрөх (逆って進む), өвөл (冬), хөөрөх (舞上る) など。

- c) 単語の第1音節に母音 **о** があれば、そのあとの音節には **а**, **у** があられず、短い **о** があらわれる。

例：орон (国), орлого (収入), оосор (紐), ётон (角砂糖)
ёслох (あいさつする) など。

- d) 単語の第1音節に **ә**, **и**, **ү** の母音があれば、あとに続く短母音は **ә** である。

例：сәрэлт (覚醒), хэмжээ (度量)
дээшлэх (向上する), үзэг (ペン)
идэвх (積極性), үргэлжлэх (続く)
など。

母音が続いてあらわれる規則を表に示すと次頁のとおり。

単語の第1音節にある母音	あとにあらわれる母音		
	短母音	長母音	二重母音
а, аа, ай, я, яа, яй у, уу, уй, ю, юу	а, я	аа, яа, уу, юу ы, ий	ай, уй
о, оо, ой, ё, ёо	о, ё	оо, ёо, уу, юу, ы, ий	ой
ө, өө, е	ө, е	өө, өө, үү, ий	эй, үй
и, ий, э, ээ, е, еэ ү, үү, үй, ю, юү	э, е	ээ, еэ үү ий	эй, үй

解説：

(1) 第2音節以降にあらわれる長母音 уу, үү, юу, юү は、上の規則に反してそのあとにあらわれる母音を決定する。

例：оруулах (入れる), өргүүлэх (もち上げさせる), оюутан (学生),
хоёулаанд (二人の両方に) など。

(2) また и と ий の母音はどんな単語でも第2音節以降にあらわれることができる。

例：давших (前進する), дэвших (昇進する), оргих (湧き出る)
эхийн (母の), багшийн (先生の) など。

(3) 外国から借用した若干の単語はこの規則に関係ない。

消去される母音と接合母音

§ 20. 消去される母音の規則

1. 子音で終わっている単語に長母音ではじまる接尾辞をつけるとき、その語末の子音の前にある短母音は、他の規則によって要求されなければ消去される。

例：үсэг + ийн _____ үсгийн (文字の)
аймаг + аас _____ аймгаас (アイマクから)
дэвтэр + ээр _____ дэвтрээр (ノートで)

2. 子音で終わっている単語に子音ではじまる接尾辞をつけるとき、規則の要求によりその接尾辞の前に母音が入られるなら、語末子音の前の短母音は消去される。

例：арав + н _____ арван (十個の)
боловсор + л _____ боловсрол (教育)
бусад + д _____ бусдад (他人に)
сурагчид + д _____ сурагчдад (学生たちに)

үсэр + х _____ үсрэх (跳ぶ)

3. и以外の短母音で終わっている単語に長母音ではじまる接尾辞をつけるとき、その単語の語末の短母音を消去する。

例：хурга + аар _____ хургаар (子羊で)

мөнгө + ийг _____ мөнгийг (お金を)

хэрэглэ + ээд _____ хэрэглээд (使用して)

§ 21. 母音が消去されない理由

1. 七子音のいずれかが母音を伴わないことになるようであれば、短母音を消去してはならない。

例：самбар + ын _____ самбарын (黑板の)

боловсрол + оор _____ боловсролоор (教育で)

2. 九子音のあとにあらわれた九子音が母音を伴わないことになるようであれば、短母音を消去してはならない。

例：буцсан + аас _____ буцсанаас (帰ってから)

төгссөн + ий _____ төгссөний (終わったことの)

3. 形動詞未来形の接尾辞-хの前にある短母音は消去されない。

例：давтах + ыг _____ давтахыг (繰り返すことを)

олох + ын _____ олохын (得ることの)

4. 舌尖の н, 深い奥舌の г の識別母音は消去しない。

例：санал + аар _____ саналаар (考えで)

онол + ыг _____ онолыг (理論を)

хāгас + аар _____ хагасаар (半分で)

магад + аар _____ магадаар (確かさで)

5. ж, ч, шの三子音以外の子音のあとにあらわれた и の母音は、その前の子音を軟音化するはたらきをもっているため、消去してはならない。

例：охин + оо _____ охиноо (自分の娘を)

танил + аас _____ танилаас (知人から)

барил + ыг _____ барилыг (方途を)

6. 連続して現われた三つの子音の第3番目の子音が舌尖の н, 深い奥舌の г となるようなら、それらの前の母音を消去してはならない。

例：хундага + аар _____ хундагаар (盃で)

эрдэнэ + ээс _____ эрдэнээс (宝から)

харагдана + аа _____ харагданаа (見えるよ)

7. 人名, 姓, 町名, 土地の名前など特殊な名詞の弱化母音を消去してはならない。

例：Улаанбаатар + аас ————— Улаанбаатараас (ウランバートルから)
 Төмөр + ийг ————— Төмөрийг (トゥムルを)
 Базар + аар ————— Базараар (バザルにより)

8. 時には、若干の単語で短母音を消去すると語幹がこわされることになるので消去しないこともある。たとえば、**төлөв** (様子) という単語に**-өөр** (〜で) という接尾辞、つけると **төлбөөр** と書くことになるので、短母音は消去せずに **төлөвөөр** と書く。

§ 22. 接合母音

文字の規則にしたがい、子音で終わっている単語に子音ではじまる接尾辞をつけるとき、それらの間に母音を書く場合と書かない場合がある。たとえば、**гар** (手) という単語に接尾辞**-т** をつけるときはその間に母音を書かず、**гарт** と書く。しかし **мод** (木) という単語に接尾辞**-т** をつけるときは二つの子音の間に母音 **о** を入れて **модот** と書く。このように、子音で終わっている単語に子音ではじまる接尾辞をつけるときに正書法規則の要求で書かれる母音を接合母音 (**жийрэглэх эгшиг**) という。

接合母音が書かれるところは次のとおり。

(1) なんらかの子音で終わっている単語に、後ろに母音をもたない **в, г, л, м, н, р** の六つの子音のどれかで始まる接尾辞をつけるとき、その間に母音を挿入する。

例：гар + в ————— гарав (出た)
 яв + гтун ————— явагтун (行きなさい)
 ус + л ————— усал (灌漑する一語幹)
 тох + м ————— тохом (鞍褥)
 дүүр + н ————— дүүрэн (満ちた)
 их + рхүү ————— ихэрхүү (尊大な)

しかし、上の六つの子音が後ろに母音をもっていれば、その前に母音を挿入しない。

例：гар + вал ————— гарвал (出れば)
 бич + мэл ————— бичмэл (草稿)

(2) **д, в, ж, с, т, х, ц, ч, ш** の九子音で終わっている単語に、さらに後ろに母音をもたない九子音のどれかで始まる接尾辞をつけるときは、その間に母音を挿入する。

例：үз + ж ————— үзэж (見て)
 их + с ————— ихэс (高官)
 тат + ш ————— таташ (挽き肉)
 нух + ц ————— нухац (こねること)

しかし、**с** と **х** の文字で終わっている単語に**-т** と **-ч** をつけるときはその間に母音を挿入しない。

例：усч (水運び人), тусч (当たり, 当って), түүхч (歴史家), мэхт (ずるい) など。

また **в, г, л, м, н, р** で終わっている単語に、上の九子音のいずれかで始まる接尾辞をつけるときも、その間に母音を挿入しない。

例：аавд (おとうさんに), багц (束), булш (墳墓), хамж (一緒にやる一語幹), сонинд (新聞に), гарц (とれ高, でき高)

(3) 子音で終わっている動詞に、形動詞未来の接尾辞 **-х** をつけるときは、その前に必ず母音を挿入する。

例：ир	+ х	_____	ирэх	(来る)
ол	+ х	_____	олох	(得る)
үз	+ х	_____	үзэх	(見る)
бос	+ х	_____	босох	(起きる)
сонирх	+ х	_____	сонирхох	(興味をもつ)
нэрэлх	+ х	_____	нэрэлхэх	(高慢でいる)

§ 23. 識別母音

単語の第2音節以降で、奥舌の **н** ([ŋ]) と区別するために舌尖の **н** ([n]) の後に書かれた短母音 **а, о, э, ө** 及び第2音節以降で、浅い奥舌の **г** ([g]) と区別するために深い奥舌の **г** ([G]) の後に書かれた短母音 **а, о** を識別母音 (ялгах эгшиг) という。

例：сана	(思う一語幹)	_____	сан	(倉)
оно	(的中する一語幹)	_____	он	(年)
өргөнө	(持ちあげます)	_____	өргөн	(広い)
энэ	(これは, この)	_____	эн	(幅)
бага	(小さい)	_____	баг	(バク—行政単位)
шарга	(黄褐色の)	_____	шараг	(焼かせておけ)
олго	(交付する一語幹)	_____	олог	(得させておけ)
товгор	(隆起した),		хагал	(割る一語幹)
гаргана	(出します),		ботголно	(仔ラクダを生む)

§ 24. 語末の弱化母音の規則

語末では、**б, г, л, н** の四つの子音のあとに、**у** と **ү** 以外のどんな短母音を書くこともできる。

例：домбо (壺), сүмбэ (銃の棚杖), бага (小さい), хөрөнгө (資本)
тагла (栓をする一語幹), зэмлэ (とがめる一語幹), хана (壁)
шөнө (夜) など。

一方 **в** と **м** の子音のあとには、時おり人名や疑問の助詞などで短母音を書くことができる。

例：Лхагва (人名), Пагма (人名), юу вэ? (何ですか?) など。

上の六つ以外の子音のうちでは、語末に и 以外の弱化母音を書くことはない。

例：банди (寺院の新発意), салхи (風) など。

子音 ГИЙГҮҮЛЭГЧ АВИА

§ 25. 子音に関する理解

発音にさいして、肺から出た空気が外に出るとき、なんらかの発音器官の妨害にあつて出る音の子音 (гийгүүлэгч) という。たとえば б の音を発音するときには両唇が合わさつて空気の流れをさまたげる。д や т の音を発音するときには、舌尖が上の門歯のつけ根(歯茎)につき、空気がとどこおりなく出るのをさまたげている。

子音の発音には必ず噪音がともなうので、噪音が含まれた音を、子音ということにしてもよい。

わが国の新しい表記法では、子音をあらわすのに б, в, г, д, з, ж, к, л, м, н, п, р, с, т, ф, х, ц, ч, ш, щ という 20 個の文字がある。

子音の分類

子音は、発音のさいにどんな発音器官が積極的に関与しているかにより、あるいはどういう状態で発音されているかにより、また声が含まれているかないかにより、いくつかに分類できる。

§ 26. 調音様式による子音の分類

いくつかの子音を発音するときには、二つの発音器官が密着し、肺から出た空気はこの閉鎖を破って外へ出る。こうした音を閉鎖音 (хамжих гийгүүлэгч) という。

モンゴル語の閉鎖音は б, п, д, т, г, к, з, ж, ц, ч である。

м の音を発音するときには上唇と下唇を、н の音を発音するときには舌尖と上門歯裏側の歯茎を、また ан の н の音を発音するときには奥舌と軟口蓋をそれぞれ閉鎖するが、空気の流れはこの閉鎖を破らずに鼻を通して外へ出るので、この三つを鼻音化閉鎖音 (хамжин хамаршсан гийгүүлэгч) という。

解説：閉鎖音の з, ж, ц, ч の四つは dz ([dz]), dj ([dʒ]), ts ([ts]), tj ([tʃ]) の音から成っているので、破擦音 (хамжин шүргэх гийгүүлэгч) とも呼ぶ。

その他の子音を発音するときには、発音器官のどれかが他の発音器官にきわめて近づいて狭いすきまができ、空気の流れはそのすきまを通して外へ出る。

たとえば、х の音を発音するときには、奥舌が口蓋に近づいて、その間にすきまができたとき、空気の流れはそのすきまを通して摩擦して外へ出る。с の子音の発音では、舌尖

と硬口蓋の間のすきまを通して空気が外へ出る。

このような子音を摩擦音 (шүргэх гийгүүлэгч) という。モンゴル語の摩擦音は в, с, ш, х, л, р である。

このうち, л の子音は発音のさいに空気の流れが舌の両側で摩擦して出るので側音 (хажуугийн гийгүүлэгч) ともいう。

また р の音は発音のさいに舌尖をふるわせるので振動音 (чичрэх гийгүүлэгч) という。

このように、子音は調音様式によって、1) 閉鎖破裂音、2) 破擦音、3) 鼻音化閉鎖音、4) 摩擦音、5) 側音、6) 振動音、に分けられる。

§ 27. 発音器官の関与による子音の分類

a) 発音のさいに唇が積極的に関与して出される子音を唇音 (уруулын гийгүүлэгч) という。

モンゴル語の唇音は, б, п, ф, в, м である。б, п, м の音の際に唇を合わせせる。в の音を発音するとき、唇は完全に合わされず、狭いすきまがある。ф の音の発音では、下唇が上の門歯に触れる。

b) 子音は、舌のどの部分で発音されるかにより、前舌と後舌の二つに分けられる。

(1) 前舌子音は, д, т, з, ж, ц, ч, н, с, ш, л, р である。これらを発音するときには、前舌部が歯や歯茎に着いたり、それらの近くに達する。

(2) 後舌子音は, к, г, х, н(г) である。これらを発音するときには、後舌部が軟口蓋に着いたり、その近くに達する。

§ 28. 声の有無による子音の分類

子音の発音には、声が含まれるものと含まれないものの二種類がある。これに従ってすべての子音を有声(または、弛み)と、無声(または、張り)の二つに分ける。

a) б, в, г, д, ж, з, л, м, н, р は、発音のさいに噪音のほかに、声帯が振動して声加わり、発音器官の動きも一般に力が弱いので有声子音 (дуутай гийгүүлэгч) または弛み子音 (сул гийгүүлэгч) という。

b) к, п, с, т, ф, х, ц, ч, ш, щ を発音する時には、声が含まれず、これらは噪音だけから成っており、発音器官の動きもより力強いので、無声子音 (дуугүй гийгүүлэгч) または張り子音 (чанга гийгүүлэгч) という。

上に述べた子音のすべての分類を表にすると次のとおり。

発音器官 調音様式		唇		舌			
		張り	弛み	前		後	
				張り	弛み	張り	弛み
閉鎖音	破裂	п	б	т	д	к	г
	破擦			ц, ч	ж, з		
	鼻音化		м		н		н(г)
摩擦音	摩擦	ф	в	с, ш		х	
	側音				л		
	振動音				р		
声の有無		無声	有声	無声	有声	無声	有声

音節について

§ 29. 音節に関する理解

精密に観察すると、私たちは単語を発音するとき、肺から出る空気を一度にまとめて出しているのではなく、少しずつ区切って出している。ある単語を発音するとき、いくつか区切れがあれば、その単語は同じ数の音節に分けられる。

たとえば、байгуулсан（建設した）という単語を発音するときは бай-гуул-сан と三つの小さな空気の切れ目を入れて発音するので三音節の語である。このようにして、ах（兄）は一音節、ах-мад（古参）は二音節ということになる。

このように、一息で発音される一つあるいはいくつかの音を音節（ye）という。

音節は一つあるいはいくつかの音から成っている。このとき、それぞれの音節には必ず母音がある。

子音文字だけで音節が構成されることはない。したがって、単語にいくつか母音があれば、それと同数の音節があると言える。母音は音節を成り立たせる音である。

たとえば、сургууль（学校）という単語には母音が二つあるので、この単語は сур-гууль の二音節である。

§ 30. 音節分けについて

モンゴルの新しい文章語には次にあげる音節がある。

1. 一つの母音だけからなる音節（V）：

э-ээн（主人）， о-рон（地方）， а-шиг（利益）， а-тар（未開墾地）。

2. 母音と子音からなる音節（V+C）：

оч（行く一語幹）， он（年）， ав（取る一語幹）， ир（来る一語幹）。

3. 子音と母音からなる音節 (C + V) :
 са-на (思ふ一語幹), тоо (数), хий (ガス), бай (在る, 居る一語幹),
 ха-лаа (交替)。
4. 子音-母音-子音からなる音節 (C + V + C) :
 гал (火), сар-маг (ヤク), дэв-тэр (冊子)。
5. 母音-子音-子音からなる音節 (V + C + C) :
 улс (国), өвс (草), авч (取り, 取って), өвч (完全な)。
6. 子音-母音-子音-子音からなる音節 (C + V + C + C) :
 хувьс-гал (革命), төгс-гөл (結末), давт (繰り返す一語幹), давс (塩),
 барьц (掴む所)。
7. 母音-子音-子音-子音からなる音節 (V + C + C + C) :
 элст (砂のある), өвст (草のある)。
8. 子音-母音-子音-子音-子音からなる音節 (C + V + C + C) :
 хөрст (土壤に), давст (塩気のある)。

追補：長母音及び二重母音は二音節とならず一音節である。

例：ай-маг (アイマク), аа-руул (乾かした凝乳), ойр-хон (すぐ近くの),
 о-луу-лаа (大勢して) など。

母音で終わっている音節を開音節という。

例：ой (森林), хөө (煤), са-на-на (思います) など。

子音で終わっている音節を閉音節という。

例：өг (与える一語幹), ол (得る一語幹), мэд (知る一語幹),
 сур (学ぶ一語幹) など。

アクセント ӨРГӨЛТ

§ 31. アクセントについて

二つあるいはそれ以上の音節をもった単語にあらわれる母音は、全く同じようには発音されず、それらのいずれか一つが他より強く、はっきりと発音される。

たとえば, тэнэгэр (平安な) という単語にあらわれた二つの *ə* の母音のうち, 最初の *ə* は後の *ə* より明瞭に聞こえる。батагасан (堅固にした) という単語にあらわれた四つの *a* のうち, いちばん最初のものははっきりと聞こえ, ほかのものはそれよりあいまいに聞こえる。

一つの単語にあらわれた複数の音節のうち他のものより強く, 明瞭に発音され, そのように聞こえる音節をアクセント (強勢 өргөлт) という。

モンゴル語の強勢は常に単語の第1音節に置かれる。したがって、単語の第1音節の母音を強勢母音とよび、それ以降の音節の母音を非強勢母音という。

強勢母音を長母音や二重母音と混同してはならない。長母音や二重母音は、強勢・非強勢のどちらの音節にもあらわれうる。たとえば、**агаар** (大気) という単語の短かい **a** は強勢母音であり、長い **aa** は非強勢母音である。

文中で独立した意味を持たずに、補助的な性質で用いられる若干の付属語はアクセントをもたない。たとえば、**ширээн дээр** (机の上に)、**хот уруу** (町へ向って) というとき **дээр** と **уруу** は独立したアクセントをもたない付属語である。

§ 32. 外来語のアクセント

外国語からモンゴル語に入って多くの年月を経て習慣化した単語は、本来のモンゴル語と同様第1音節にアクセントをもっている。

例：шүлэг (詩), судар (教典), яндан (警笛), Долгор (人名),
Дамдин (人名), Банзрагч (人名) など。

しかし、近代に外国語からモンゴル語に入ってきて未だ習慣化していない単語の中心アクセントは必ずしも第1音節にはなく、語頭、語中、語末どこにもあらわれうる。

例：фа́брик (工場), Пу́шкин (プーシキン), ра́дио (ラジオ),
ана́томи (解剖学), проже́ктор (探照灯), винто́в (ライフル),
пальто́ (外套) など。

習慣化していない外来語のアクセントを有する音節の母音は、モンゴル語のアクセントを有する音節の母音にくらべて長く発音される。たとえば、**контóр** (事務所)、**миню́т** (分) という単語は **контóор**、**мину́т** と発音される。しかし、習慣化していない外来語の強勢音は、母音を重ねてあらわさず、短母音として書いて長く発音する。

若干の子音の説明と正書法規則

§ 33. 子音нの正書法

わが国の表記法では、**н** という文字で **нам** (党) という語の最初に見られるような舌尖の **н** と、**ан** (獺) という単語の最後にあらわれたような奥舌の **н** の二つの音をあらわす。

舌尖の **н** を発音するときは、舌尖が上の門歯のつけ根 (歯茎) につく。一方奥舌の **н** を発音するときは、奥舌面が軟口蓋につく。奥舌の **н** は常に母音のあとに書かれる。

例：сан (倉), бин (煎餅), дүн (結果), сайн (よい), хонх (鐘),
монгол (モンゴル) など。

奥舌の **н** と区分するために、舌尖の **н** のあとには母音が書かれる。

例：санаа (考え), энэ (この、これは), байна (あります、います)
шунах (渴望する), түүнэ (集めます)。

もしも舌尖の **н** のあとにある母音を書かないと別の単語になる。

例：сана (思ふ一語幹) ————— сан (倉)
энэ (この、これは) ————— эн (幅)
байна (あります) ————— байн (байн байн で時々)
шунах (渴望する) ————— шунх (朱)
түүнэ (集めます) ————— түүн (集めて)

など。

奥舌の **н** のあとに舌尖の **д, в, ж, л, т, ц, ч** の音があらわれると、これらの子音にひかれて奥舌の **н** は舌尖の **н** に聞こえる。

例：мандах (興隆する), банз (板), Ганжав (人名), дэнлүү (灯火)
хүнтэй (人のいる), онц (特に), санчиг (こめかみの毛) など。

このような単語にあらわれた **н** のあとには母音を書かない。たとえば、хүнтэй という単語の **н** は、үнэтэй (高価な) という単語の **н** と同じに聞こえるが、хүн (人) という語幹はもともと **н** のあとに母音をもたないので、舌尖の **н** として聞こえても母音は書かない。

また、軟音符の前の **н** は、舌尖の **н** として発音される。

例：хань (友だち), ань (閉じる一語幹), онь (最初), хоньчин (羊飼い)
оньсого (なぞなぞ) など。

§ 34. 子音 **Г** について

Г の文字は、(гар という単語の **г** のような) 深い奥舌の音と、(гэр という単語の **г** のような) 浅い奥舌の音をあらわす。

表記法では、深い奥舌の **г** のあとに **а, о, у, ы** の四つの母音のうちどれかを必ず書く。

例：гал (火), гогод (にら), гутал (長靴), даргын (長の) など。

もし、**г** の文字のあとに **а, о, у, ы** のどれもあらわれていない場合は、その **г** を浅い奥舌の **г** という。

例：гэм (罪), гийгүүлэгч (子音), гөрөөс (獣), гялгар (光沢ある)
агт (去勢した馬, ロバ等), хаг (表面の薄膜), хэрэг (用事) など。

§ 35. Б と В の正書法

語頭にはおもに **б** の文字を書く。

例：бага (小さい), баяр (喜び), багш (先生), Билэгт (人名)
бөөр (腎臓), бичиг (文書) など。

しかし外国からの少数の借用語の語頭には **в** の文字を書くことがある。

例：ваар (瓦), вандан (腰掛け), вандуй (えんどう), Ваанчиг (人名)。
語中では, в, л, м, н の四つの子音のあとに常に б を書く。

例：авбал (取れば), хэлбэл (話せば), элбэг (豊富な), самбар (黒板) など。
語中や語末で, в, л, м, н 以外の子音および母音のあとには в の文字を書く。

例：очвол (行けば), өвөл (冬), хэлэв (話した), эвэр (角)
юу вэ (何ですか) など。

в の音が б, м, т, ч, ц の音の前には б, п, в, ф のように聞こえるが、その単語の語幹をこわさないために в のまま書く。

例：авмагц (абмагц), авбал (аббал), авч (апч), дэвтэр (дэфтэр) など。
追補：モンゴル語の в と ф を発音するときは上唇と下唇が近づき空気が摩擦して外へ出るが、ロシア語の в と ф を発音するときは、下唇が上の門歯に近づき摩擦して発音される。

§ 36. 子音 П, К, Ф, Щ について

П の文字は本来のモンゴル語の語中には決して書かれることがないが、時おり語頭に書かれる。

例：пагдгар (ずんぐりした), пичигнэх (カタカタする), палхийх (パチャンという)
пял (皿) など。

К, Ф, Щ の文字は本来のモンゴル語には全く用いられず、外来語にしか書かれない。

例：кино (映画), Карл Маркс (カール・マルクス), капитал (資本),
фабрик (工場), франц (フランス), физик (物理学), Щорс (人名),
Щедрин (人名) など。

§ 37. 語頭の Хと Гを書き分ける規則

ハルハ人は, с, т, х, ц, ч, ш などの張り子音の前にはあらわれた語頭の х と г の音を混同して発音している。

例：хатан (妃) ————— гатан (同左)
хасах (減ずる) ————— гасах (ク)
хахир (キーキーいう) ————— гахир (ク)
хачин (奇妙な) ————— гачин (ク)
хоршоо (消費組合) ————— горшоо (ク) など。

このように混同して発音される単語のうち г ではじまる単語は少数である。すなわち：
гавшгай (突撃の), гацуур (小枝), гутал (長靴), гарчиг (目次), гашуун (苦い),
гутах (だめにする), гаслах (悲しむ), гашлах (すっぱくなる), гэтлэх (免れる),
гатлах (渡る), гогцоо (輪索), гишүүн (メンバー), гацах (停滞する),
гувчуур (漁網), гишгэх (歩む), гачигдах (貧困に耐える), гутамшиг (恥),

гүтгэх (誹る) などである。

これ以外の単語はほとんど x で書きはじめる。

例：хацар (頬), хавчих (はさむ), хөх (青い), хашин (のろい、ぐずな),
хасах (減ずる), хатуу (硬い) など。

§ 38. 語頭の Д と Т を書き分ける規則

ハルハ人は, с, т, х, ц, ч, ш などの張り子音の前にあらわれた語頭の д と т を混同して発音している。

例：дотор (中) ————— тотор (同左)
тос (油) ————— дос (ク)
дах (毛皮の外套) ————— тах (ク)
тутам (~毎) ————— дутам (ク)
тавцан (プラットホーム) ————— давцан (ク)
давцуу (性急の) ————— тавцуу (ク)
туших (家畜の足を縛る) ————— душих (ク) など。

こうして混同して発音している単語のうち д ではじまる語は少ない。すなわち：

давтах (復習する), дасгал (練習), дохих (合図する), давхар (層, 階),
дахих (繰り返す), дөт (いちばん近い), давших (前進する),
дахлай (遅れて生まれた子山羊, 子羊), дөч (四十), давч (狭い),
довтлох (攻撃する), дугтрах (振る, 採る), дарсайх (ざらざらになる),
догшин (気の荒い), дугтуй (封筒), дархан (神聖な), дотор (中),
дусал (滴), дасах (慣れる), дохио (合図), дутуу (足りない),
дух (額), дэвтэх (しみ込む), дэвтэр (冊子), дэвших (昇格する) などである。

これ以外の単語はほとんど т で始まる。

例：ташуур (鞭), татах (引く), тогтох (定まる), тусгай (特別の),
тугших (打穀する) など。

§ 39. 七子音の規則

б, в, г, л, м, н, р の七子音は単語に書かれるときその前または後ろのどちらかはっきりと聞きとれる場所に必ず母音を伴って書かれる。よってこれらの七個の子音を, 母音を伴う子音 (эгшигт гийгүүлэгч) と呼ぶ。

例：монгол (モンゴル), баавар (鞍止めの飾り金具), авчирсан (持って来た),
гамнана (大切にします), авбал (取れば), домбо (壺),
бадралаар (盛りにより), нэрлэ (名づける一語幹) など。

追補：奥舌の **н** のあとにあらわれた対格接尾辞の **-г** は母音を伴わなくてよい。

例：Аавын айшинг барив. (おとうさんの建物をたてた)

Номын санг цэвэрлэ. (図書館を掃除しなさい)

また、それだけで書かれる付属語は母音を伴わなくてよい。

例：Морь л байна. (馬はいる) Ах нь ирэв. (兄は来た)

§ 40. 九子音の規則

д, т, ж, в, с, ш, ч, ц, х の九子音は語中や語末にあらわれるとき、時には前や後ろに母音を伴い、時にはどちらにも母音を伴わずに書かれるので非母音化子音 (варимдаг эгшигт гийгүүлэгч または варимдаг гийгүүлэгч) という。たとえば модот (木のある) という単語の **т** の子音は前に母音を伴って書かれている、しかし алт (金) という単語の **т** の子音は母音を伴わずに書かれている。どういうところで前あるいは後ろに母音を伴って書かれ、どういうところで母音を伴わずに書かれるのか、というと：

a) 九子音のうちのどれかが七子音のどれかのあとにあらわれれば母音を伴わずに書かれる。

例：бүгд (すべての), замт (道のある), хара (冬凍らない水, 川), олж (得て), шавьж (虫), хөлс (汗), тэгш (平らな), цамц (シャツ), хавч (エビ), хавх (罨) など。

形動詞の未来形接尾辞 **-х** は常にその前に母音を伴って書かれるのでこの規則にはあてはまらない。

例：ирэх (来る), явах (行く), олох (得る) など。

b) 九子音のあとに九子音が書かれるとき、後の九子音は前または後ろのどちらかはつきり聞こえるところに母音を伴って書かれる。

例：Батад (バトに), хүчит (力強い), давтаж (復習して), бэхэж (強固になる一語幹), утас (糸), идэш (食物), уншицгаа (一緒に読む一語幹), оточ (医者) など。

九子音の **с** と **х** のあとには、**т** または **ч** の子音が母音を伴わずに書かれるという規則がある。

例：уст (水のある), нүхт (穴のあいた), тусч (当たり, 当って), түүхч (歴史家) など。

§ 41. 連続する二子音と三子音の規則

二つの子音が続いてあらわれ、二番目の子音が深い奥舌の **г** あるいは舌尖の **н** であればそれらの子音の前に母音を書かない。

例：хурга (子羊), алга (掌), сурга (教える一語幹), хаагар (びっこの),

торго (絹), бичнэ (書きます), явна (行きます), олно (得ます) など。
もし二番目の子音の前の子音が舌尖の *н* や深い奥舌の *г* であれば、それらの識別母音は上の規則に支配されずに書かれる。また二番目の子音の前の子音が軟音化していれば、母音 *и* を書く。

例: багана (柱), шанага (杓子), санана (思います), сахина (守ります), солино (交換します) など。

実詞 (名詞, 形容詞, 数詞) の語根, および現在未来時制動詞では, 連続してあらわれた三つの子音の最後が深い奥舌の *г* または舌尖の *н* であるとき, その前に適当な弱化母音を書く。

例: хундага (盃), янзага (かもしか類の仔), эрдэнэ (宝), урсана (流れます), үзэгдэнэ (見えます), үйлдэнэ (作ります) など。

実詞語根・現在未来時制動詞以外の実詞や動詞接尾辞には, この規則はあてはまらない。

例: томтго (大きくする一語幹), дурсгал (記念), явцгаа (一緒に行く一語幹) ярьцгаа (いっしょに話す一語幹) など。

§ 42. Ж, Ч, Ш の後に書く短母音の規則

語頭にあらわれた *ж, ч, ш* のあとには, 男性語であれば *а, о, у* のうちどれか聞き取れるものを書く。

例: жагсаал (行進), жороо (側対歩一片側の二足を同時に出す馬の進み方) журам (秩序), чарга (橈), чоно (狼), чухал (重要な), шал (全くの), шороо (土), шувуу (鳥) など。

語頭にあらわれた *ж, ч, ш* の三子音のあとには, 女性語であれば *и, ө, у* の三つのうちどれか聞きとれるものを書く。

例: жижиг (小さい), жетөө (嫉妬), жүжиг (演劇), чичрэх (震える) чөлөө (自由), Чүлтэм (人名), шөл (スープ), шүд (歯) など。

語中にあらわれた *ж, ч, ш* の三子音のあとに短母音が要求される場合は, 男性語でも女性語でも母音 *и* だけを書く。

例: ажил (仕事), хачин (奇妙な), орших (在る), хөгжим (音楽), хүчин (力), түшиг (支え) など。

しかし, 語中にあらわれた *ж, ч, ш* のあとに長母音が要求される場合は, どれでも聞きとれるものを書く。

例: довжоо (建物の土台), ачаа (貨物), ташуур (鞭), хөгжөөх (強化する) хөлчүү (酔った), сүлжээ (編んだもの), хөшөө (記念碑) など。

§ 43. 軟子音と硬子音

モンゴル語の男性語にあらわれた子音には硬子音と軟子音の二種類ある。たとえば, **ax** (兄) という単語の **x** は奥舌で発音されている。一方 **axь** (前進する一語幹) という動詞の **x** は **ax** の **x** より著しく前寄りに発音されている。

このように、もともと発音される位置より前寄りに発音されている子音を軟音化子音 (**эөөлөрсөн гийгүүлэгч**) という。

本来発音される位置で普通に発音される子音を硬子音 (**хатуу гийгүүлэгч**) という。

例: хол (遠い)	—————	холь (まぜる一語幹)
ам (口)	—————	амь (生命)
тав (五)	—————	тавь (五十)
хар (見る一語幹)	—————	харь (帰る一語幹)

女性語の子音は、男性語のように軟子音と硬子音の区別がなく、大部分が軟音化して発音されている。

§ 44. 男性語の軟音化子音の識別規則

単一の軟音化子音のあとには軟音符を書いて硬子音と区別する。

例: **морь** (去勢馬), **унь** (包の天井木), **сургууль** (学校), **аль** (どれ),
буурь (台), **тавь** (五十) など。

もし続いてあらわれた二つの子音が二つとも軟音化していれば、子音のあとに **и** を書いて硬子音と区別する。

例: **тамхи** (タバコ), **тархи** (脳), **солби** (交叉させる一語幹),
бургих (巻き上がる), **цалгих** (はね上げる), **салхи** (風) など。

語頭の軟子音のあとに短い **а** を書かねばならないなら、その子音に軟音符をつけたり母音 **и** をつけて軟音化せずに、ただ **я** を書く。

例: **мянга** (千), **хяагаар** (境界), **хямд** (安い), **нялх** (赤ん坊),
бяр (力), **нял** (すみれ) など。

もし軟音化子音のあとに長い **аа**, **оо**, **уу** を書く必要があれば、その子音のあとに **и** を書き、そのあとに長母音の一文字を書く。

例: **хиаг** (植物名), **голио** (イナゴ類), **халуу** (かわうそ)。

追補: **ж**, **ч**, **ш** の三子音は常に軟音化して発音されるので、ことさらに軟音化させることはない。

モンゴル語の **в**, **ц**, **с** の三子音は一般に軟音化することがない。

§ 45. 硬音符と軟音符の規則

ь と ь はどんな発音ももたないので記号文字という。

語中あるいは語末にあらわれた **я** と **ё** をその前の子音と切り離して発音するため、**я, ё** の前に硬音符 (**ъ**) を書く。

例：гар**ъ**я (出よう), ол**ъ**ё (手に入れよう), уул**ъ**з**я** (会おう),
оч**ъ**ё (行こう) など。

女性語では、**е** の音をその前の子音と切り離して発音するために軟音符 (**ь**) を書く。

例：у**ь**е (見よう), ма**ь**д**ь**е (知ろう), х**ь**э**ь**е (話そう), о**ь**г**ь**е (与えよう),
би**ь**ч**ь**е (書こう) など。

また、軟音符は単一の子音を軟音化するにはたらきのあることは上に述べた。

例：ха**ь**р**ь** (帰る一語幹), ху**ь**в**ь** (部分), а**ь**м**ь** (生命) など。

もしも男性語で軟音化した子音のあとに **я, ё** を切り離して発音する必要のあるときは、軟音符を硬音符に替えず、軟音符のあとに直接 **я** や **ё** を書く。このとき軟音符は分離と軟音化のはたらきを同時になす。

例：бол**ь**ё (よそう), ха**ь**р**ь**я (帰ろう), га**ь**в**ь**я**т** (功績ある),
ха**ь**р**ь**я**т** (所属する), со**ь**л**ь**ё (換えよう) など。

§ 46. 軟音符と И の交替規則

1. 軟音符で終わっている単語のあとに、母音 **а, о, у, и** のどれかがあらわれれば、その軟音符は母音 **и** に変わる。

例：мор**ь** + оо _____ мор**ио** (自分の馬を)
бар**ь** + аад _____ бар**иад** (搦んで)
бар**ь** + уу _____ бар**иу** (衣服がきつい)
ам**ь** + ийг _____ ам**ийг** (命を)

2. 軟音符のあとに七子音 **в, г, л, м, н, р** のどれかがあらわれれば、軟音符は **и** に変わる。

例：хон**ь** + н _____ хон**ин** (羊)
тар**ь** + в _____ тар**ив** (植えた)
хор**ь** + г _____ хор**иг** (禁制)
бар**ь** + м _____ бар**им** (こぶしの長さ)
бар**ь** + мал _____ бар**имал** (彫刻)
та**в**ь + на _____ та**вина** (置きます) など。

3. 形動詞接尾辞の **х** は常にその前に母音を伴って書かれるので、この **х** の前にある軟音符は **и** になる。

例：хал**ь** + х _____ хал**их** (あふれる)
зор**ь** + х _____ зор**их** (めざす)
тан**ь** + х _____ тан**их** (人を知っている)

4. 軟音化した九子音のあとにさらに九子音を書くときは、軟音符を **и** に変える。

例：сахь + ж _____ сахиж (守って)
 захь + дал _____ захидал (手紙)

§ 47. 軟音符が И にならない場合

1. 軟音化した七子音のあとに九子音があらわれれば、軟音符は и にならずそのままである。

例：хонь + чин _____ хоньчин (羊飼い)
 халь + ж _____ хальж (あふれて)
 тарь + сан _____ тарьсан (植えたこと)
 арьс (人・動物の皮), хальс (殻) など。

2. 二つの単語から成っている語の軟音符は и にならず、そのまま書くという規則がある。

例：ааль + гүй _____ аальгүй (性格の悪い)
 горь + гүй _____ горьгүй (当にならない)
 суурь + гүй _____ суурьгүй (根拠のない)

§ 48. -ЫН と -ИЙН の正書法

接尾辞-ын (-ыг) は、ж, ч, ш, г, ь, и 以外の子音、及び母音で終わっている男性語に書く。

例： малын (家畜の) хувцсыг (衣服を)
 олын (多くを), аавын (おとうさんの)
 дарга + ын _____ даргын (長の)
 домбо + ыг _____ домбыг (壺を) など。

接尾辞-ийн (-ийг) は、女性語につける。

例：эхийн (母の), үхрийн (牛の), хөгшдийг (老人たちを)
 мөнгө + ийг _____ мөнгийг (お金を)
 сүмбэ + ийг _____ сүмбийг (棚杖を) など。

接尾辞-ийн (-ийг) はまた、ж, ч, ш, г, ь, и で終わっている男性語にも書く。

例：шавьжийг (虫を), ачийн (恩の), багшийн (先生の), цогийг (熾を),
 завь + ийг _____ завийг (ボートを)
 анги + ийг _____ ангийг (階級を) など。

§ 49. 動詞派生接尾辞-Л の正書法

1. 九子音のどれかで終わっている単語に動詞派生接尾辞-лをつける場合、その前に母音を書く。母音で終わっている場合は直接つける。

例：эх + л _____ эхэл (始める一語幹)
 тус + л _____ тусал (助ける一語幹)

товч	+	л	—————	товчил	(要約する一語幹)
бат	+	л	—————	батал	(強化する　　ク)
тоо	+	л	—————	тоол	(数える　　ク)
суга	+	л	—————	сугал	(抜く　　ク)
хага	+	л	—————	хагал	(割る　　ク) など。

このような接尾辞-лをもった単語にさらに接尾辞をつけるとき、母音が必ずしも要求されない場合、その後ろに母音を書いてはならない。たとえば、эхэлという単語に接尾辞-жをつけるとき、母音は要求されないので эхэлжと書いてはならない、эхэлжと書く。

追補：九子音で終る若干の単語に接尾辞-лをつけるとき、単語の語幹がこわされるようなら、その後ろに母音を書くという規則がある。

例：үндэс	+	л	—————	үндэслэ	(もとづく一語幹)
хувцас	+	л	—————	хувцасла	(着物を着る一　ク)

2. 七子音のどれかで終る単語に接尾辞-лをつけるとき、その後ろに母音を書く。

例：хэв	+	л	—————	хэвлэ	(印刷する一語幹)
таг	+	л	—————	тагла	(栓をする一　ク)
тор	+	л	—————	торло	(網をかぶせるク)
ажил	+	л	—————	ажилла	(仕事をする一ク)
ялгал	+	л	—————	ялгалла	(曲用させる一ク)
сум	+	л	—————	сумла	(銃を装弾するク)

§ 50. 単語の分綴規則

書いている途中で一つの単語がその行におさまらなくなった場合、その残りを次の行に分けて綴ることができる。このように綴りを分けるときは音節で分け、おさまりきれなくなった行の最後にはダッシュ(一)をつける。たとえば、дэвтэрлэсэн(綴じた)という単語を分けて綴るときは、дэв-тэрлэсэн, дэвтэр-лэсэн, дэвтэрлэ-сэнと、三種類に分綴できる。

分綴に際しての注意事項：

1. 一音節から成っている単語を分綴してはならない。

例：ам(口), зам(道), хонь(羊), хөрст(土壤に), тусч(当り, 当って)。

2. 新しい行に移す音節の最初には必ず子音がなくてはならない。たとえば, модон(木造の), хүний(人間の)という単語を分綴するとき, мод-он, хүн-ийと切ってはならず, мо-дон, хү-нийと切る。

三つの子音が連続してあらわれている単語では、最後の子音の前で切る。

例：хорс-лог(見目のよい), жавх-лан(堂々たること)。

3. いくら独立した音節であるとはいえ、1文字を行末に残したり次行に移してはならない。たとえば о-лон, ү-е, нэрл-эのように切ってはならない。

4. и, ь, ьをその前の音節から離してはならない。

例： да-лайх (振り上げる), авь-я (取ろう), хонь-чин (羊飼ひ),
гавь-яа (功績)。

§ 51. 略語について

文書では、数多くあらわれる若干の単語を便宜をはかり略して書くやり方がある。とはいえ、だれもが出てきたすべての単語を略して書いたら意味もわからず、混乱することになるので、一般に慣れ親しまれた少数の語を略して書く。おもに国家機関や官庁の名称を略す。

単語を略して書くには：

1. その単語の第1音節で単語の代りをさせて略することができる。

例： ня-бо = нягтлан бодогч (会計・簿記係)

Монцамэ = Монголын цахилгаан мэдээ (モンゴル電報通信社, モンツァメ)

2. その単語の頭文字で単語の代りをさせて略することができる。

例： ВНМАУ = Бүгд Найрамдах Монгол Ард Улс (モンゴル人民共和国)

ВНБАУ = Бүгд Найрамдах Болгар Ард Улс (ブルガリア人民共和国)

НҮБ = Нэгдсэн Үндэстний Байгууллага (国際連合)

§ 52. 外来語の正書法

モンゴル語には他の外国語から借用した単語が非常に多い。それらは一般に二つに分けることができる。

1. 古い時代にモンゴル語に浸透してきて長い年月の間使っているうち、外国語だとはわからないようになり、本来のモンゴル語の法則に組み込まれた一連の単語。

例： шүлэг (詩), судар (教典), шатар (将棋), эрдэнэ (宝 <サンスクリット語>), шил (ガラス <チベット語>), савхи (山羊皮 <ロシア語>)

яармаг (定期市 <ドイツ語>), цонх (窓), янз (様子), чийдэн (電灯),

тайван (太平 <中国語>) など。こうした単語を書くときは本来のモンゴル語の規則に従って書いたり曲用させたりする。

2. 新しい時代に、おもにロシア語を仲介として借用され、モンゴル語の法則に完全には支配されていない世界的な性質の一連の単語。

例： станц (駅), пионер (ピオネール), фабрик (工場), пролетари (プロレタリア), коммунизм (共産主義), атом (原子), радио (ラジオ),

машин (自動車), аппарат (器具) など。

こうした単語を書くときには、一般にロシア語でどのように書いているかに従う。その際：

a) 語末の母音は強勢があればそのまま残し、強勢がなければ削除する。

例： машин (〈машина〉), фабрик (〈фабрика〉), кино (〈кино〉), кило (〈кило〉)

b) 外来語にモンゴル語の接尾辞をつけるとき、その単語の強勢母音が男性なら男性語につける接尾辞を、強勢母音が女性なら女性語につける接尾辞をつける。

例： механикаар (機械技師により), пионерийн (ピオネールの), пролетариас (プロレタリアから)

c) г, к, ш, ж, ч, ц で終る単語に属格・対格の接尾辞をつけるときは、女性語につける接尾辞をつける。

d) -ия で終わっているロシア語の単語では語末の-ия はおもに削除して書く。

例： станц (〈станция〉), комисс (委員会 〈комиссия〉), лекц (講義 〈лекция〉)

しかし、-ия で終わっている単語の最後の子音が軟音化していれば、-я だけを削る。

例： арми (〈軍 армия〉), Англи (イギリス 〈Англия〉) колони (植民地 〈колония〉)

e) 外国語の у の母音は女性母音とみなす。

例： Пушкинээр (プーシキンにより), клубээс (クラブから) など。

§ 53. 音声変化

会話では言語音が他の音から切り離されてそれだけ発音されることはきわめて稀で、会話の過程で他の音と連なり、鎖のように次から次へと組み合わさり列をなして発音される。

従って、若干の音声はその前や後ろにある音に影響され・変化することがある。

音声はさまざまに変化する。

1. 同化 (авиа ижилсэх).

ある音が、その前や後ろにある音に影響されて、それらのどれかと全く同じになったりどれかある特徴で同じになることがある。

たとえば、сан という単語では奥舌の н が発音されている。しかし санд では上の奥舌の н が前舌面で発音される н になる。というのは、н のあとに前舌音の д があらわれたために、舌に関して同化してそのように変化したのである。

х の音は非円唇の音であるが、хонь という単語の х は唇を少しすぼめて発音される。それは х のあとに円唇母音の о があらわれたために唇に関してそれと同化しているのである。

また、単語の第1音節に о, ө があれば、そのあとには母音 о, ө が書かれる、等々。母音調和の法則も同化にほかならない。

このようにモンゴル語には同化現象が広範に存在する。

2. 異化 (авиа ондооших)

モンゴル語では、一つの単語に二つの р の子音があらわれるとどちらか一方が л に変わる。たとえば、арч という単語に接尾辞-уур がついて арчуур となるはずが、алчуур(ハ

ンカチ)と発音している。морь уруу (馬の方へ)と発音するかわりに морь луу と発音している。これはすべて異化の現象である。また、ハルハ方言では二つの張り(噪音を含んだ)の子音の一つの単語にあらわれることを嫌うので、子音 с, т, х, ц, ч, ш の前にあらわれた語頭の х を г に替え, т を д に替えて発音することがあまたにみられる。

例: хатан (гатан), хацар (гацар), татах (датах), ташуур (дашуур)

3. 交替 (авиа солигдох)

ある音が他の音にとって替わられることがある。なかでも:

д の音が с に交替されることがある。

例: хавдах (腫れる) ————— хавсах

өвдөх (痛む) ————— өвсөх

а の音が ө に交替されることがある。

例: цагаан (白い) ————— цэгээн

давших (前進する) ————— дэвших

гатлах (渡る) ————— гэтлэх

а の音が о に交替されることがある。

явган (徒歩の) ————— ёвгон

ханшаар (鼻すじ) ————— хоншоор

このようにさまざまな音が他の音にとって替わられることがある。

訳者あとがき

この小冊子は、1971年に出版されたモンゴル人民共和国の中学校初学年（＝5年生）の国語（モンゴル語）の教科書を翻訳したものです。原題は、トピラに見るように、『モンゴル語文法—音声学と正書法—』となっていますが、日本語にするにあたっては、本書を訳出した意図と、とりつきやすさを考えて、あえて『モンゴル語の発音と正書法』という表題を選びました。もとの教科書には、それぞれのセクションに練習問題がついていますが、この本では省略してあります。

ここに書かれているのは、モンゴル語の発音上の特徴と、正しい綴り方規則の説明です。最初に、モンゴル語の話しことばに注意を促し、文字と発音の違いを意識させることから始めて、モンゴル語を成り立たせている様々な音の分類や、音の組み合わせの特徴をのべ、それらを文字の上でどのように書き表わすことになっているかという、綴り字規則の説明に進みます。

ここでことわっておきたいことは、この本が本来「教科書」であることからして、読者の対象とされているのは、「モンゴル語を母国語とする12～13歳の児童」であり、日本人がモンゴル語を学ぶ際のテキストとして、全く過不足ないというわけにはいかない、ということです。そうして説明のホイントは、モンゴル人が文章を書くときに誤りやすい綴りや、文字の使い分けに置かれているので、彼らにとっては当然のこととして説明を要さないことでも、外国人としてはもっと詳しい説明の欲しい所もありますし、また反対のこともみられます。たとえば、一つ一つの単語がどのように発音されているか、ということはモンゴル人にとってわかりきったことでしょうが、外国人の学習者にとっては最大の関心事の一つです。逆に、語頭の x と r 、 μ と τ を書き分けることは（本文 § 39, 40）モンゴル人にしてみればむづかしい規則でも、われわれが間違えてみようもないことといえます。

こうしたことがらにもかかわらず、本書はそれ自体大変よくまとまっており、モンゴル語の正書法のテキストとしてその価値を減ずるものではありません。説明も要領をえた簡潔なもので、豊富な例は読者の理解を助けてくれます。正書法規則に関する必要な情報はこの本にほとんど網羅されていると言えましょう。

およそモンゴル語を学習する者にとって、その正書法、つまり綴り字の規則は簡単なものではありません。現代のモンゴル語を学んだ方は、おそらく誰もが、あのやっかいな綴りに頭を悩ました経験をお持ちのことでしょう。これは外国人に限ったことではなく、モンゴル人自身にも少なからずやっかいなものとして受け取られているようです。しかしこうした正書法のわずらわしさも、学習者が必ず一度はつき当って乗り越えていかねばならない性格のもので、避けてとおることはできません。現代モンゴルの書籍、新聞、雑誌はいうにおよばず、公文書から私信に至るまで、モンゴル人の文章はすべてこの正書法にもとづいて書かれています。この本が教科書であることからわかるように、すべてのモン

ゴル人は小・中学校でこの正書を繰り返したき込まれます。われわれにしても、正書法の規則があいまいだと、正しい綴りでモンゴル語を書くことはおろか、満足に辞書を引いて文章を読むことにもさしきわってきます。

モンゴル語を全く知らない人がこの本を入門書として利用することは無理かも知れません。また本書は音声学や言語学を興味の対象としない人にとって、それほど面白く読めるという内容のものではありませんが、モンゴル語の学習をはじめていくぶんかたち、アルファベットも覚え、自分で辞書を引いたりモンゴル語を書いたりする段階に進んだら、この小冊子を座右におかれることをお勧めします。この本は、最初に一度は必ず全体に目を通して、正書法の概要と、どこに何が書かれているかを心得ておかれるとよいでしょう。そしてモンゴル語を読んだり書いたりするときに、綴り字に関して疑問点が生じたら、折にふれて該当する項目を引いて見るようにして下さい。正書法上の問題点は、だいたい一つずつの項目をたてて説明してありますので、目次が索引の代わりとなります。訳者は、この本がモンゴル語を書く際に、正書法のハンドブックとして利用されることを願って日本語にしました。

また、もう一つの利用法として、特にモンゴル語学の初学者に精読をお勧めします。正書法の規則というのは、見方を変えれば、モンゴル人が音韻を文字によって表記する際に生ずる困難を示したものですから、「規則の数」と「音韻と表記の間のズレ」とは比例の関係にあると言えましょう。特にこの本では、モンゴル人が誤りやすい正書法上の諸点をとりたてて説明していますので、そうした音韻と表記のズレに注目して、正書法の裏にかくれているモンゴル語の音韻を推定する重要な手がかりをつかむことができます。

また、正書法規則の複雑さはそのまま正書法の不備を示すものと見ることもできます。実際、正書法規則の中には、「ロシア語を学びやすくする為に」とか「紙面スペースの経済のために」というように、思わず首をかしげたくなるような理由で作られたものが一部あることも事実です。しばしば問題となるのは、語幹に接尾辞をつける際に、語幹の母音を消去したり、つなぎの母音を入れたりする煩わしさでしょう。この規則に関していえば、全く根拠のないものではなく、モンゴル語の音韻構造の特徴に由来するものと考えられます。じつに、現行の正書法は、現代国語の音節構造の特性をそのまま表記上に反映させることに意を砕き、それを実現したものです。しかし、今からすれば、正書法の作成に当って、音韻の特徴と形態的特徴のどちらを優先させるべきかという問題に対する一つの解答例として、興味ある経験と見ることができます。

ここでモンゴル語のロシア文字正書法の歴史を概観してみましょう。II. ダムディン スレン教授によれば、従来のウィグル式モンゴル旧文字から新しい文字への「移行」の方針を打ち出したのは、1940年に開催された第10回党大会でした。これを受けて1941年の5月にはロシア文字に○とYを加えた「新文字」が、また同年11月には「新文字規則」が公布され、これは翌1942年に出版されました。この後4年の試用期間を経て1946年には新文

字規則が再検討され、「学者・知識人・教師たちの意見や批判に配慮して、いささかの修正を施し、〔新文字規則〕概要が出版された」といいます。その後1957年に「新文字委員会」が設立され、15年間の経験について活発な大衆的な議論がくりひろげられました。この委員会の命を受けて、Ц. Дамディンスレンが新文字規則の作成にあたりました。同時に、Л. Мижигは大小文字使用の問題、Т. Пагваは句読法の問題、А. Лопсанденデブは外来語表記の問題の解決にあたりました。この訳書に説明されている正書法規則もこの委員会に提出された「新文字規則」にもとづくものです。もっとも、この時の修正はそれほど大巾なものでなく、もっぱら従来あいまいだった点をより詳細に規定することに力が注がれました。(以上、 Монгол хэл бичигийн зарим асуудал, 1959を参照しました)

次に、この教科書では説明されていない正書法規則の一つを、Дамディンスレンの新文字規則によって補っておきます。

動詞語幹に連用形の接尾辞 **-ж / -ч** をつける場合、両者の使い分けについては初学者を迷わすところですが、「新文字規則」では次のように規則化しています。

§ 65. 母音に終る語のあとにはすべて **-ж** を書く。

例：тааж, хоож, харваж, санаж, сунгаж, хайж など。

§ 66. 非母音化子音 [= 9子音] のあとには **-ж** の文字だけを書く。

例：

Д бодож, удирдаж, гардаж, мөрдөж, горьдож, яндаж

Ж аж иж, хаж иж, мааж иж

Э базаж, хазаж, харгалзаж

С босож, тосож, нисэж, урсаж, өлсөж, уурсаж, өрсөж

Т хатаж, матаж, утаж, бантаж

Х мөхөж, хяхаж, нухаж, мохож, ганхаж, тархаж

Ц ноцож, буцаж, харьцаж, тэнцэж

Ч очиж, цочиж, нанчиж, жанчиж

Ш хашиж, оршиж, наршиж

§ 67. 副動詞の並行法の接辞 [= **-ж** または **-ч**] を書く際に、母音持ち 7子音のあとには大部分 **-ж** を書くが、時々 **-ч** を書く場合がある。どこに **-ж** を書き、どこに **-ч** を書くか明らかにすると：

1. м と л の子音のあとにはすべて **-ж** を書く。

例：олж, халж, хэлж, болж, хамж, томж など。

2. в と г の子音のあとには、ほとんど **-ж** を書く。

例：бүгж, давж, түгж, хавж, явж, гүвж など。

ただ、авчとөгчだけに-чを書く。

3. 長母音や二重母音を含んだり、2音節以上からなる、pに終る動詞の末にはすべて-чを書く。

例：даарч, хөөрч, хайрч, дайрч, хиарч, чангарч, суларч, хашгирч, үсэрч, ухарч, сохорч など。

4. 単音節でpに終る動詞のあとには大部分-жを書く。

例：ирж, харж, орж, барж, сорж, дарж, урж, бүрж, бурж など。

例外：хүрч, гарч, сурч など少数の話。

§ 68. 前記の-жと-чの書き分け規則は、動詞の遠過去を示す-жээと-чээの接辞の書き分けに際しても同様に従う。その際 消去できる短母音はすべて消去する。

例：бодож—боджээ, хадаж—хаджээ,
хатаж—хатжээ, болж—болжээ,
санаж—санажээ, сунгаж—сунгажээ
мөрдөж—мөрджээ, гарч—гарчээ など。

§ 67 の 4. の例外は、すべてを列挙すべきところを、あいまい性を残したままにしています。ただし実用上は、-чのつくものとして § 67 の 3. のほか хүрч, гарч, сурч, авч, өгчの5語を例外として覚えておけばこと足りるでしょう。この規則は、以前にあった-ж (-ju) と-ч (-čü) の区別において-жによる類推化が進んでいることの証左と見ることができます。

最後に、私事になりますが、訳者は1974年の末から、日本・モンゴル協会の主催するモンゴル語講習会で2期ほど講師として、受講者の方々と一緒に文法や会話を勉強する機会を与えられました。週1回2時間の講習会では、正書法の詳細に関する説明は断念し、かわりに正書法規則をハンドブックの形でお届けすることを約束するにとどめざるを得ませんでした。その後、訳稿はほどなく出来上りましたが、訳者の怠慢により、お手許に届けるのがのびのびになっておりました。ここにかけてのお約束を果たすことができたことを大変うれしく思います。そして今も講習会で熱心にモンゴル語の学習を続けられている受講者の方々に敬意を表し、このつたない翻訳をお届けします。

さらに、この翻訳をこうした立派な印刷の形で出すことができたのは、ひとえに宮地亮一氏の御好意によるものです。宮地氏の熱意と御好意に対し、心から感謝いたします。

1977年2月9日

追記：本書は、1977年にすでに三校を終えて印刷を残すだけとなっていたが、諸般の事情により日の目を見ずにいたものである。このたび私家版として公刊するにあたり、本文には手を加えることなく当時の形そのままを印刷に付すことにした。

1983年5月26日

『モンゴル語の音声と正書法』 正誤表

頁	行	誤		正
4	-14	х нтэй	→	хүнтэй
〃	12	Монго —	→	Монгол—
10	-14	а, о, у, ы, я, ю	→	ëを加える
22	-3	すっばくなる	→	すっばくなる
25	-12	и, ө, у	→	и, ө, ү
35	9	бичигийн	→	бичгийн
〃	15	хоож	→	хөөж
36	17	огч	→	өгч

モンゴル語の発音と正書法

МОНГОЛ ХЭЛНИЙ АВИА ЗҮЙ, ЗӨВ БИЧИХ ДҮРЭМ

1983年7月1日発行

定価 1,000円

訳者 ©栗林均

発行者 栗林均

〒260 千葉県高浜1-9-6-108 ☎0472-47-1834

発売元 株式会社 ビブリオ

〒101 東京都千代田区三崎町2-2-12エコービル2F
☎03-263-7189 郵便振替 東京1-121474

ISBN4-8286-0012-4 C3087 ¥1000E